

特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの変化と 保育士の関わりについて

——新設保育所でのインタビュー調査を通して——

白取 真実¹⁾・小島 道生²⁾

1) 帝京短期大学 こども教育学科 2) 筑波大学

【抄録】

【問題・目的】 2000年に保育所の設置主体制限が撤廃された以降、多くの保育所が新設されている。これまで新設保育所を対象とした研究は非常に少なく、現在都市部で増加している、園庭がない保育所や、マンションの一室であるという保育環境において、どのように保育を進めていくのかということについては、実践の積み重ねが求められている。また、全国保育協議会（2016）によると、障害のある子どもに加えて、障害の診断はないが特別な支援を必要とする子どもがいるとした保育所は保育所全体数の8割にも及ぶ。このような背景から、新設された保育所において、特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの子どもの変化を、保育士に対するインタビュー調査から明らかにすることとした。

【方法】 新設された保育所1園において、特別な支援を必要とする子どもが在籍している2・3歳児クラスと関りのある保育士6名を対象とした。約1年半に渡り、計5回の調査が実施された。2・3歳児クラスの変化を、保育士に対するインタビュー調査により明らかにした。インタビュー内容は、子ども同士の関係や成長の様子を含めたクラスの様子、保育士がどのようなところに困難を抱え、その困難をどのように解決しているのか、またどのようなことに気をつけて保育をしているのかなどである。

【結果】 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した結果、4のコアカテゴリ、9のカテゴリ、26の概念が生成された。これらのクラスの子どもの変化については、子ども同士が互いに探り合う時期から、認め合う姿に変化していくことが明らかになった。

【考察】 保育士は、困難を抱えながらも、具体的な保育方法を試行錯誤している状況であった。特別な支援を必要とする子どもへの個別の配慮を行いながらも、行事を乗り越えること、手をかけすぎないことが、クラスの子どもの変化に有効に働いていることが示唆された。さらに、保育士が感じる困難さに関わる要因の一つである、したい保育ができないという概念は、環境構成を含めて保育方法を検討途中である新設保育所に共通する課題である。

【キーワード】 特別な支援を必要とする子ども、新設保育所、クラスの子どもの変化、インクルーシブ保育

I. 問題の所在と目的

2015度の子ども・子育て支援新制度の施行後、保育の受け皿整備が進められている。保育所の数は年々増加の傾向にあり、中でも小規模保育事業、家庭的保育事業、事業所内保育事業及び居宅訪問型保育事業などの特定地域型保育事業所の数は急激に増加している¹⁾。また、2000年に保育所の設置主体制限が撤廃されて以降、都市部で新設されている保育所の多くは、株式会

社が運営する保育所が多数を占めている²⁾。これまで、株式会社の保育所への参入には、保育の質の低下や評価の方法などについて議論がなされてきた³⁾。池本（2018）は、諸外国の株式会社の保育界への参入の状況により、我が国においても、設置主体に関わらず子どもの能力を向上させる機関として国の関与の必要性を指摘している⁴⁾。厚生労働省（2021）によると、待機児童は今後もしばらく続くと言われており⁵⁾、株式会社の保育界への参入なしでは対応するこ

とは難しいと考える。全ての保育所で実践と研究を深め、保育の質を確保することが、新設保育所の拡大における重要な課題である。

新設保育所では、保育方針を自ら生み出さなければならぬこと、保育観や保育経験の違う保育士の集団で保育をすること、子どもだけでなく保護者を含めてすべてにおいて信頼関係を形成していかなければならないという課題が報告されている⁶⁾。これまで新設保育所を対象とした研究は非常に少なく、現在都市部で増加している、園庭がない保育所や、マンションの一室であるという保育環境において、どのように保育を進めていくのかということについては、実践の積み重ねが求められている⁷⁾。

ところで、2016年「障害者差別解消法」が施行され、保育所においては、障害のある子どもをはじめ、特別な支援を必要とする子どもの受け入れが進んでいる。全国保育協議会（2016）によると、障害のある子どもに加えて、障害の診断はないが特別な支援を必要とする子どもがいるとした保育所は保育所全体数の8割にも及ぶ⁸⁾。この特別な支援を必要とする子どもの中には発達障害が疑われる子どももあり、保育士が気になると捉える子どもの姿は、発達障害の早期発見・支援に有効であると言われている⁹⁾。また、特別な支援が必要な子どもに対する保育士の肯定的な認識が重要であることも指摘されている¹⁰⁾。

特別な支援を必要とする子どもの保育に関しては、保育士に対する意識調査¹¹⁾、クラスの変化に着目した実践研究が行われている¹²⁾。これらの研究によると、障害のある子どもとない子どもが共に過ごす経験は、互いに育ち合うことができるため、意義があると捉えている保育士が多い。一方で、特別な支援を必要とする子どもを保育する際、多くの保育士が困難さを抱えているという指摘があげられる^{13, 14)}。この保育士が抱える困難さは、保育士のバーンアウトなどの心理的負担に影響を及ぼすとされており¹⁵⁾、保育士の心理的な負担を軽減することが求められる。また、藤原（2013）によると、特別な支援を必要とする子どもを保育する場合には、チームとして保育を支えるコーディネート能力が求められるとし¹⁶⁾、今後も様々な保育実践の積み重ねが必要である。

本研究で対象としたクラスは、障害のある子

どもに加え、障害の診断はないが特別な支援を必要とする子どもが在籍するクラスである。保育所開設から約一年半の間、対象とするクラスに関わりのある保育士に対するインタビュー調査を行った。刑部（1998）によると、「ちょっと気になる」という子どもの特徴は、保育者や子ども同士の相互作用により作り出されるとした¹⁷⁾。またそこには、在園児か新入児といった関係が影響を与えるとしたが、全員が新入児である新設保育所という環境においてクラスが集団として変化していく過程を明らかにした研究はこれまで行われていない。

本研究の目的は、以下の2点である。一つ目は、特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの子どもの変化を、保育士に対するインタビュー調査から明らかにすることである。子ども同士の関係や成長の様子を含めたクラスの変化の過程を明らかにしていく。二つ目は、新設保育所において保育をする場合、保育士がどのようなところに困難さを抱え、どのように解決しているのか、またどのようなことに気をつけて保育をしているのかという具体的な取り組みの内容を明らかにすることである。

新設保育所を対象とした研究報告は非常に少ないことから、保育実践としての一つの資料となることを期待した。

Ⅱ. 方法

1. 保育所の概要と調査対象者

株式会社が運営する東京都23区内認可保育所1園に勤務する保育士とした。201X年7月に新設されたこの認可保育所は、マンションの1階に設置されており、定員は46名である。0歳から5歳児を対象とした保育所だが、開設時一番大きい子どもが3歳児であった。また、子どもの人数と保育環境により、開設時2・3歳児だったクラスが合同で過ごしていた。

園庭はあるものの、近隣との関係で自由に使用できない状況があり、外遊びの際には近隣の公園を使用していた。また、ホール等広いスペースがなく、各保育室も仕切り等でつながっている等、限られたスペースで保育を行っている。本研究では、保育所開設当時2・3歳児だったクラスに関わりのある保育士6名を調査の対象とした。研究協力者には、事前に性別、年齢、婚

姻状況、保育資格、役職、経験年数、勤務時間、職歴等のフェイスシートに回答してもらった。

園長である A 先生は、社会福祉法人の保育所で長く保育士をした後（経験年数 10 ～ 19 年）、保育者養成系の専門学校で教員をした経験がある。園内研修を積極的に行い、園長自身も保育に参加し、子どもの様子を観察したり、クラス担任の悩みを聞いたりするなど、保育の質の向上に努めている。

対象者全員が女性である。年齢は、29 歳以下が 2 名、30 ～ 39 歳が 1 名、40 ～ 49 歳が 2 名、50 歳以上が 1 名であった。経験年数としては、A・E・F 先生が、10 ～ 19 年、B 先生が 4 ～ 9 年、C・E 先生が 3 年以下であった。保育士以外の資格としては、A・C・E・F 先生が幼稚園教諭免許状を保有していた。職歴としては、幼稚園や保育所等の他の保育施設での勤務経験を全員が有していた。また、保育士としての経験年数が 3 年以下と回答している保育者が 2 名いるものの、子育て経験や、介護施設での勤務経験を有しており、社会経験は豊富であった。

2. 調査手続きと内容

新設保育所の実践を聞き取りたいという趣旨をあらかじめ伝え、同意の得られた保育士に対して、半構造化インタビュー調査を行った。201X 年 10 月より調査を開始し、1 回目、2 回目はグループによるインタビュー調査を行った。インタビューガイドは、保育所の様子、子どもの様子、困っていることとした。2 回の調査を終えたところで、特別な支援を必要とする子どもが複数おり、保育が成り立たないという保育士からの声が多かった。進級しクラス担任が変更となるタイミングで、保育士一人一人に焦点を当てインタビュー調査をした方が子どもの様子を詳しく聞き取ることができると判断し、個別のインタビュー調査に切り替えた。個別のインタビュー調査は、3 回目から 5 回目である。インタビューガイドは、クラスの子どもの様子、気になる子どもの様子、保育士の取り組みとした。グループインタビュー調査、個別のインタビュー調査においても、保育士の自然な会話の流れを重視し、質問の表現や順序は適宜変更した（Table 1）。

インタビューのデータは、同意を得て IC レコーダーで録音し、逐語録を作成した。インタ

ビューの平均時間は 32 分で（最長 1 時間 17 分、最短 16 分）であった。インタビュー調査実施後、筆者自ら逐語録を作成した。逐語録の量は、平均 5, 251 字（最大 12, 743 字、最小 2, 263 字）であった。

Table 1. インタビュー調査の回数と方法

回数	方法	対象者
1 回目 (201X 年 10 月)	グループ	園長 (A 先生), B 先生, C 先生, D 先生 (傍観: 主任, 看護師, 本部職員 2 名)
2 回目 (201X+1 年 1 月)	グループ	園長 (A 先生), C 先生, E 先生
3 回目 (201X+2 年 6 月)	個別	園長 (A 先生), B 先生, F 先生
4 回目 (201X+2 年 8 月)	個別	園長 (A 先生), F 先生
5 回目 (201X+3 年 2 月)	個別	園長 (A 先生), F 先生

3. 倫理的配慮

研究の目的や内容及び、倫理的配慮事項については、協力園の園長に口頭と書面で説明を行い、書面にて同意を得た。また、協力者にも、研究の概要について説明を行い、IC レコーダーによる音声の録音を含めて、口頭にて同意を得て実施した。なお、個人名は仮名表記とし、個人情報に配慮した。これら一連の調査について、A 短期大学研究倫理委員会の規定に沿って行い、教授 2 名に承諾を得た。

4. 分析方法

インタビュー調査によって得られたデータは、木下 (2007) による、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M - GTA とする）を用いて分析した。M - GTA とは、Glaser&Strauss によって考案された GTA を、木下が実践しやすいように改良した、質的研究の方法である。ヒューマンサービス領域での実践的な活用に適しており、限定された狭い範囲における人間の認識、行為、感情、それらに關係している要因や条件などをデータに即して検討

していくことができる¹⁸⁾。

本研究は、保育所1園における限定された環境で調査を行った。また対象者は、開設時2・3歳児だったクラスに関わりのある保育士6名とし、グループインタビュー調査と個別のインタビュー調査の両方を採用している。このことから、研究者の問題意識に忠実にデータを解釈できる、M-GTAで分析を進めた。

分析テーマを、「特別な支援を必要とする子どもを含めたクラス運営の困難さ」と設定した。しかし、分析を進めていくうちに、「クラスの子どもの変化」と「保育士の関わり」の中で、困難な中でも前進していく過程が見えてきた。そこで、「特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの変化」として分析テーマを再度設定した。

分析テーマを設定し直した後、データの中から、関連のある具体例を見つけだし、説明概念を作成した。概念を作る際には、分析ワークシートを作成し、概念名、定義、具体例、思いついたことや疑問を理論的メモに記入した。これを繰り返し、概念名を生成したが、具体例が出てこなかった場合は、その概念は有効でないと判

断した。解釈が偏る危険を防ぐため、生成された概念の完成度は、類似例の確認だけでなく、分析とは反対の対極例を考え、そのような概念がデータから作られるかどうか、比較しながら確認を行った。次に、生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討した。さらに、複数の概念の関係からなるカテゴリを生成し、カテゴリ相互関係から分析結果を図にまとめた。その概要をストリートラインとして簡潔に文章化した。

一つの例として、本研究で生成された概念のうち、「障害の診断がないことによる困難」をもとに説明する。まず、インタビュー調査のデータの中で、分析テーマに関連する、「障害名がつくような子はもちろん特別なんですけども、育ちの中でも、遅い早いがあるじゃないですか。そこと障害みたいなところを間違えないように気をつけていきたいな。幼いのと、障害と全然違うカテゴリーだと思うので、そこは気を付けて保育していきたいなと思っています。」という部分に着目した。次に、この部分についての意味を自分の解釈とは反対の観点からも考えた上で、適切に表現する言葉は何かという順序で検

Table 2. 分析ワークシートの例

概念名	障害の診断がないことによる困難
定義	障害かどうかははっきりしていると保育方針が立てやすい
具体例	●集団の中で彼らが困ることとか、個人が、個別で困ることとかそういったものが、わりとI君は多動というか、K君のほうが自閉的っていうか、もちろん診断名がついているお子さんたちではないので、私がそういう風に言い切ってしまうのにはダメなんですけど、そういう傾向がどっちかっていうと違いが見えてきて、それを今模索しているような感じています (F先生)。 ●発達検査を受けたらだいぶ上がってしまって、役所からはこの数値だと加配は付けられないみたいなことを言われたんです (A先生)。 ●どこまでがアスペルガーなのか、高機能自閉症なのかってわからなくて (C先生)。 (その他3事例省略)
理論的 メモ	・障害名がはっきりしていると保育方針が立てやすいのか？ ・保育士は加配の保育士を付けてほしいと感じている。 ・障害からくるものか、今後その他の要因からくるものなのかを見極めている。 ・対極例より、障害の診断がはっきりしている方が、子どもが伸びるという実感がある。 ・対極例より、保護者が子どもの姿を理解し具体的な行動とすると、保育士の困難さは軽減している。
対極例	●保護者の方はすごく気にかけていて、色々な療育機関とか医者とかたくさん行って早い段階からアプローチしているのも大きいんじゃないかなと思って (B先生)。

討した。そして、検討を重ねた結果、「障害かどうかははっきりしていないことで保育しづらい」と定義し、「障害の診断がないことによる困難」という概念を生成した。その後の分析過程については、分析ワークシート Table2 に示す。

次に、カテゴリの生成過程についてである。カテゴリの生成については、当初保育士が感じるクラス運営の困難さに焦点を当てていたことから、保育士が感じる困難さを分析するところから始めた。分析を進めていく中で、特別な支援を必要とする子どもを含めたクラス運営に困難さを感じながらも、クラスの変化や子どもの成長を捉えていたことがわかった。また、常にクラスの状態を見ながら保育方法を変えていく過程や、保育士の困難さに影響を与える要因が多く話されていたことから、4のコアカテゴリと、9のカテゴリを生成した。

M-GTA では、分析ワークシートが十分に完成し、分析焦点者からみて、設定した間に対応して明確な結論が得られていること、新たに重要な概念が生成されなくなった段階を分析の終了としている。本研究においては、生成された概念及びカテゴリ間の相関関係については、保育学と特別支援教育学に精通し、筆者の価値観や問題意識に理解のある教員を交え2回の検討を行った。その結果、生成された28の概念を26に整理した。また、対象とした保育所の元園長（現在他の保育所に勤務）に内容の確認とアドバイスをもらった。

結果図については、本研究の目的である、特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの子どもの変化を視覚的に理解できるように作成した。また、結果図の作成については、分析ワークシートの作成と同時進行で行い、生成された概念及びカテゴリ間の相関関係を図にまとめていった。これを繰り返すことで、分析の完成度を高めた。

最後に、分析結果を概念とカテゴリだけで簡潔に文章化したものを、ストーリーラインとした。

5. 分析者の立場

質的研究法による分析は、研究者の思考が分析結果に大きく影響を与える。特定のフィールドを対象とした調査には、そこにいる人々の日常の世界の成り立ちを踏まえて理解することが

求められる¹⁹⁾。筆者は、保育士として約10年の勤務経験がある。また、対象とした保育所の園内研修に参加しており、インタビュー調査を行った保育士とは交流が深い。

Ⅲ. 結果と考察

M-GTA による分析を通して、4のコアカテゴリ、9のカテゴリ、26の概念が生成された（Table 3）。また、それぞれのカテゴリ、概念の相関関係や流れを結果図として示した（Figure 1）。特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの変化について、ストーリーラインで説明する。なお、コアカテゴリを□、カテゴリを〔 〕、概念を【 】で示した。

<ストーリーライン>

特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの子どもの変化について述べる。開設時は、子ども同士が互いに〔探り合いの時期〕であった。その後、一緒に過ごす時間が長くなることで互いの存在を〔認め合う姿〕に変化したことから、コアカテゴリとなるクラスの子どもの変化というプロセスが明らかになった。

このクラスの子どもの変化プロセスには、コアカテゴリである保育士が感じる困難さ、具体的な保育方法が影響を与えている。保育士は、〔子どもへの対応の難しさ〕を感じる中で、〔理想と現実の差〕を感じながらも、試行錯誤しながら保育を進めている。保育士は、他の職員と【意見を出し合う】、クラス全体を【落ち着かせる】などの〔意図的な行動〕を繰り返しながらも、〔特別な支援を必要とする子どもへの配慮〕を行っていた。また、保育所の生活において重要となる【行事を乗り越える】こと、【手をかけすぎない】という行動が、クラスの変化に有効に働いていた。

さらに、保育士が感じる困難さに影響を及ぼす要因としては、〔保育士が感じる困難さを軽減させる要因〕だけでなく〔どちらの影響もある要因〕が明らかになった。

次に、カテゴリの動きについてである。分析により示された、特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの子どもの変化を説明する。開設当初は、友達が出来ていないことを指摘する、特別な扱いをすることをよく思わないなど、【特別な支援を必要とする子どもを意識する】ク

ラスの子どもの姿があった。また、落ち着いた子どもから影響を受け、クラス全体が落ち着いた姿が見られた。このことから、この時期を〔探り合いの時期〕とした。

このようなクラス子どもの姿から、開設当初は保育士が多くの困難さを感じていた。保育士

が感じる困難さとしては、特別な支援を必要とする子どもがいることからくる〔子どもへの対応の難しさ〕と、保育士がしたい保育ができないという〔理想と現実の差〕の部分で困り感を感じる保育士の姿が浮かび上がった。

保育士は困り感を抱えながらも、クラス運営

Table 3. M-GTA によるコアカテゴリ、カテゴリ、概念、定義

コア		No	概念名	定義
カテゴリ	カテゴリ			
クラスの変容	探り合いの時期	1	特別な支援を必要とする子どもを意識する	出来ていないことを指摘する、特別な扱いをすることをよく思わないクラスの子どもの姿
		2	影響を受け落ち着いた	特別な支援を必要とする子どもから影響を受けて落ち着いたなくなる
	認め合う姿	3	子ども同士の関係の構築	一緒に過ごすことで子ども同士の人間関係が構築されること
		4	なんとなく馴染む	一緒にいることが当たり前になりクラス全体が落ち着くこと
保育士が感じる困難さ	子どもへの対応の難しさ	5	障害の診断がないことによる困難	障害の診断があることにより保育方針が立ちやすい
		6	理解に困る子どもの姿	どうしてそのような行動をとるのか理解することが難しい
		7	集団への対応の難しさ	集団としてクラスを運営できない、集団全体に同じ対応ができないこと
	理想と現実の差	8	したい保育ができない	思うような保育ができないことに対して自分や周囲、環境への不満な気持ち
		9	保護者対応の難しさ	保護者に子どもの姿を伝え理解してもらいたいが、意思疎通が難しい
		10	子どもと向き合いたい	子どもの気持ちに寄り添いたいができない
保育士が及ぼす困難	良い・悪いどちらの影響もある要因	11	保育士の配置問題	人手が不足すると子どもに手がかけられないが、多すぎると意見の食い違いが起こる
		12	これまでの保育経験	これまでの経験と現在の状況を比較し比べること
		13	困難な状況に対する心持ち	保育士の予想を超えた現状は負担でもあるが、乗り越えた場合やりがいになる
	困難を軽減させる要因	14	妥協策で乗り切る	最善な方法ではないがなんとかやり過ごすこと
		15	信頼関係ができる	子どもや保護者、同僚との信頼関係ができること
		16	成長を感じる	特別な支援を必要な子ども、クラス全体の成長を肌で感じる
		17	経験からくる自信	これまでの経験と比較して、乗り越えられると思うこと
		18	保護者の障害に対する理解	保護者が子どもの障害に対して理解を示してくれること
具体的な保育方法	意図的な行動	19	落ち着かせる	クラスが落ち着くことを最優先に考えること
		20	子どもの姿を見極める	障害からくる姿か、他の要因があるのかを間違えないように気をつけること
		21	意見を出し合う	保育士同士で保育方法について相談し合うこと
		22	ケガだけはしないようにする	子ども自身がケガをしない、他の子どもにもケガをさせないこと
	結果的に有効だった行動	23	手をかけすぎない	丁寧に見すぎない、保育士が余計な世話をしないこと
		24	行事を乗り越えること	目の前の行事に一生懸命取り組むこと
	特別な支援を必要とする子どもへの配慮	25	行動を予測し防ぐ	危険な行動を予測し未然に防ぐこと
		26	個別に対応する	個々の対応が必要な子どもには保育士が一对一で関わる、個別の対応をすること

に向けて具体的な保育方法を試行錯誤している状況であった。その具体的な保育方法の中には、保育士の「意図的な行動」もあれば、「結果的に有効だった行動」も見受けられた。「特別な支援を必要とする子どもへの配慮」をしながらも、クラス全体の成長に向け保育士が関わっている姿が明らかになった。これが、クラスの子どもの変化として子ども同士が「認め合う姿」に繋がっていった。

さらに、保育士が感じる困難さに影響を与え

る要因としては、「良い・悪いどちらの影響もある要因」と「困難さを軽減させる要因」の二つのカテゴリが明らかになった。障害の診断はないが、特別な支援を必要とする子どもについては、保護者支援の困難さが指摘されているが¹⁵⁾、【保護者の障害に対する理解】の概念では、保護者に理解してもらうことにより、保育士が感じる困難さを減らすことに繋がっていることが明らかになった。このことから、今後保護者支援のプロセスについても検討が求められる。

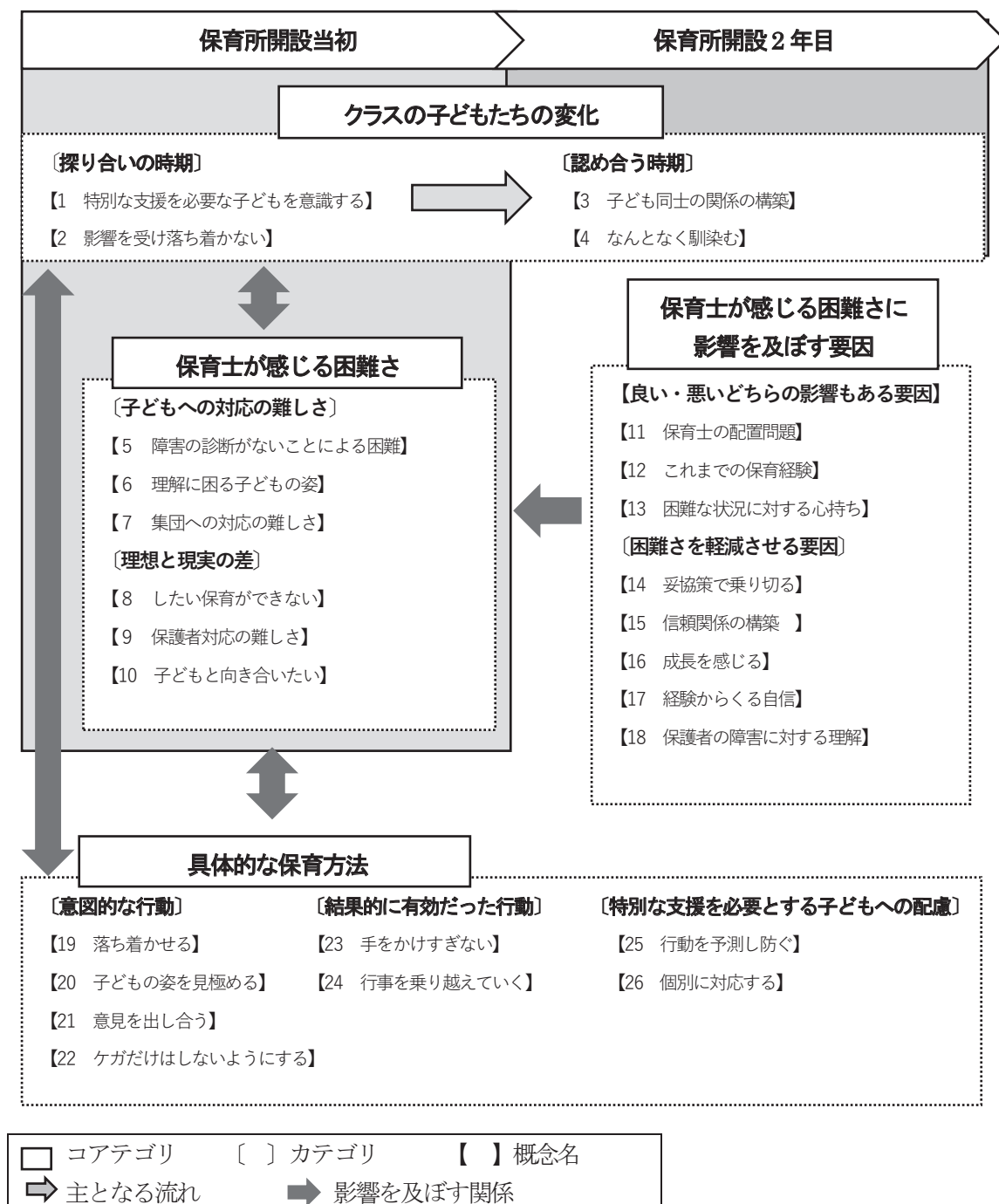


Figure 1. 「特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの変化の結果

IV. 総合考察

本研究は、特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの子どもの変化を、保育士に対するインタビュー調査から明らかにすることを目的とした。また、新設された保育所で保育を行う場合、保育士がどのようなところに困難を抱え、その困難をどのように解決しているのか、どのようなことに気をつけて保育をしているのかという具体的な取り組みの内容について、可視化することとした。

保育所開設当初は、子ども同士が互いに探り合う時期があった。特別な支援を必要とする子どもに対して、クラスの子どものできないことを指摘したり、集団の活動と異なる行動をとることをよく思わず保育士に訴えたり、特別な支援を必要とする子どもを意識する子どもの姿が見られた。また、一緒になって部屋を走り回る、保育士の指示が通りにくいなど、特別な支援を必要とする子どもから影響を受け落ち着かない様子も見られた。その後、一緒に過ごす時間が長くなることで互いの存在を認め合い、一緒にいることが当たり前の姿に変化する過程を明らかにすることができた。

保育士がとっていた具体的な保育方法として、【行事を乗り越える】という概念が生成された。特別な支援を必要とする子どもにとって、行事という普段とはかけ離れた活動に参加することは、多くの困難が指摘されている²⁰⁾。一方で、行事を通じて、関わり合うことは、仲間として認め合うことに繋がるという効果が期待できると考える。しかし、新設保育所において行事を行うこと、保育活動を軌道に乗せるまでの過程では、すべてを一から作り出さなければならず大変な作業である。保育所開設当初は、インタビューの中でも、ホールのような広いスペースがない環境でどのように運動会の練習をするのか、異年齢混合のクラスでの劇づくりをするのかなどの課題が多く、一つ一つの行事をこなしていくのが精一杯という保育士の様子が伺えた。保育所開設2年目になると、行事を通して子どもの成長を感じたと話す保育士もいた。これは、活動を媒介にして排除的な関係を改善した浜谷・五十嵐・芦澤（2013）の実践報告を支持するものとなった²¹⁾。行事には多くの困難さがあるが、行事を乗り越えることにより、クラスに良い変

化をもたらすという効果を明らかにすることができたことは、本研究の成果である。

また、〔理想と現実の差〕のカテゴリの中の【したい保育ができない】という概念は、園庭を使用したいが制限されている、保育室が狭いなどの環境面からくる、対象とした保育所特有のものである。落ち着かない、パニックになってしまう子どもなどの特別な支援を必要とする子どもの場合、落ち着くまで別のスペースで過ごす、パーテーションで仕切るなどの個別の環境を工夫することが、有効であるとしている²²⁾。しかし、都市部で増えている新設保育所の中には、公園用地を園庭として利用する、住民からの理解が得られずに、園庭を使用できない現状が多数報告されており²³⁾、本研究で明らかになった保育士が感じる困難さは、現在増えている多くの新設保育所の現状に共有する課題であり、今後このような保育所での保育方法についても研究の積み重ねが求められる。

次に、新設保育所で保育をする場合、保育士が感じる困難さについて考察する。保育士の感じる困難さを軽減した要因の一つとして、【保護者の障害に対する理解】があげられる。木曾（2016）によると、気になる子どもを保育する場合、“子どものため”という思いが保護者に伝わらないことが、保育士の心理的な負担となることを指摘している²⁴⁾。本研究においても保育園開設当初は、保護者と保育士の関係も探り探りの状態で、気になる子どもの姿があるものの、ありのままの姿を保護者に伝えることを躊躇する保育士の姿が見られた。保育所開設2年目になると、保護者との信頼関係ができ始め、家庭と保育所で子どもの姿をお互いに伝い合うことができるようになったことが報告され、それをきっかけに関係機関を紹介したり、個別に対応しているという事実を保護者にも伝えたりということに繋がっていた。このような保護者との良好な関係の背景には、対象としたクラスが少人数制の学級であり、送迎時のこまやかな対応や、常に決まった保育士が関わるることができたことが影響していたと考える。幼稚園教諭の精神的健康に影響を及ぼすストレスや保育者効力感の影響を明らかにした西坂（2002）によると、保育者の「子ども理解・対応の難しさ」や「学級経営の難しさ」は、経験の積み重ねによってうまく対応することができること、保育者とし

での成長につながることを明かにしている²⁵⁾。本研究では、保育士が感じる困難さだけでなく、「保育士が抱える課題を軽減させる要因」をカテゴリとして明らかにすることができたことも本研究の特色である。

また、本研究では、新設された保育所に焦点を当てた。新設保育所では、幼稚園・保育所以外にも様々な経歴を持った保育士が、それぞれの保育観をすり合わせながら、その保育所独自の園文化を構築していくことが求められる。新設保育所ではすべてを一から作り上げることから、多くの困難さが予想されるが、困難さを軽減する効果が期待できるものとして園内研修があげられる。本研究が対象とした保育所においても、インタビュー調査の中で保育士から語られることはなかったため、カテゴリや概念として明らかにしなかったが、園内研修を行い、園長が自身の保育観を伝えたり、保育環境について意見交換したりする取り組みが行われていた。奥山・石井・本田・山崎（2017）の先行研究によると、主体的な園内研修により、様々な課題を乗り越えて新設保育所が軌道に乗った実践を報告している²⁶⁾。これらのことから、今後新設保育所を対象とした、園内研修モデルの作成が有効であると考えられる。

ところで、M-GTAによる分析は、限定的な範囲における現象を包括的に描くことができる点でメリットがあるとされている。また、この分析で得られた結果は、類似する現場に戻し検討を繰り返すことが重要であると述べられている²⁷⁾。本研究によって明らかになった特別な支援を必要とする子どもを含めたクラスの変化は、ある新設保育所を対象とした限定的な範囲における現象である。そのため、現在増えている新設保育所に還元し実践を繰り返すことで、本研究の有効性を検証することが、本研究の課題である。

【付記】

この研究は、日本私立学校振興・共済事業団平成30年度若手・女性研究者奨励金の助成を受けて行った研究である。

本論文はその一部を日本保育学会第72回大会にてポスター発表したものを、再度まとめ直したものである。

【謝辞】

本研究にご協力下さいました保育所の園長ならびに保育士の皆様に深く感謝申し上げます。また、執筆に当たりご指導くださいました。

【文献】

- 1) 厚生労働省（2021）保育所等関連状況取りまとめ
<https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000821949.pdf>（2021年11月1日）
- 2) 厚生労働省（2015）平成27年 市区町村・設置主体別保育所数
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/syutaihetsu27.pdf>（2021年11月1日）
- 3) 大倉得史（2018）委託事業者の交替に伴う保育の質の変化と子どもたちへの影響について 保育学研究, 56（3）, 33-44
- 4) 池本美香（2018）保育評価の展望——元的評価の意義と可能性—— 保育学研究, 56（1）, 11-20
- 5) 前掲 1)
- 6) 山川ひとみ・藤崎春代（2010）保育者の専門性向上の検討 - 新設保育園に転職した保育者の語りの分析から 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 12, 159-166
- 7) 白取真実（2018）新設保育所の現状と課題に関する研究の動向 貞静学園短期大学研究紀要, 10, 85-93
- 8) 社会福祉法人全国社会福祉協議会・全国保育協議会（2016）全国保育協議会会員の実態調査報告書 2016
http://zenhokyo.gr.jp/cyousa/h29_06/201706.pdf（2021年11月1日）
- 9) Dereu, M., Raymaekers, R., Warreyn, P., Schietecatte, I., Meirsschaut, M., & Roeyers, H. (2012) Can child care workers contribute to the early detection of autism spectrum disorders? A comparison between screening instruments with child care workers versus parents as informants Journal of autism and developmental disorders, 42(5), 781-796
- 10) Park, M.-H., Dimitrov, D.M., & Park, D.-Y. (2018) Effects of background variables of early childhood teachers on their concerns about inclusion: The mediation role of confidence in

- teaching Journal of Research in Childhood Education, 32 (2), 165-180
- 11) 田川元康・本谷望・津村幸子 (2006) 障害児の統合保育に対する保育士の意識 京都女子大学発達教育学部紀要, (2), 23-31
 - 12) 浜谷直人・五十嵐元子・芦澤清音 (2013) 特別支援対象児が在籍するクラスがインクルーシブになる過程 — 排除する子どもと集団の変容に着目して — 保育学研究, 51 (3), 331-342
 - 13) 木曾陽子 (2012) 特別な支援が必要な子どもの保育における保育士の困り感の変容プロセス 保育学研究, 50 (2), 116-128
 - 14) 平澤紀子・藤原義博・山根正夫 (2005) 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究: 障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から 発達障害研究, 26 (4), 256-267
 - 15) 木曾陽子 (2016) 未診断の発達障害の傾向がある子どもの保育や保護者支援と保育士の心理的負担との関係 — バーンアウト尺度を用いた質問紙調査より — 保育学研究, 54 (1), 67-78
 - 16) 藤原里美 (2013) 発達障害児への保育実践能力に関する研究 — 専門機関の実践研修を受講した研修生の視点から — 保育学研究, 51 (3), 343-354
 - 17) 刑部育子 (1998) 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析 発達心理学研究, 9 (1), 1-11
 - 18) 木下康仁, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法 (2007) 富山大学看護学会誌, 6 (2), 1-10
 - 19) 木下康仁 (2003) グラウンデッド セオリー アプローチの実践 質的研究への誘い 弘文堂
 - 20) 杉山弘子・坂本由佳里 (2018) 特別な支援を必要とする子どもの行事への参加と仲間関係 尚絅学院大学紀要, (75), 35-44
 - 21) 前掲 12)
 - 22) 細川かおり (2012) 軽度発達障害児に対する保育所での保育における支援および困難に関する調査研究 鶴見大学紀要 3 (49), 39-43
 - 23) 奥山優佳・石井美和・本田誠・山崎安可音 新 (2017) 設保育施設の今日的課題: 保育士の主体的研修の視点から 東北文教大学東北文教大学短期大学部教育研究, 7, 1-10
 - 24) 前掲 15)
 - 25) 西坂小百合 (2002) 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響 教育心理学研究, 50 (3), 283-290
 - 26) 前掲 23)
 - 27) 前掲 18)

Changes in class including children with special support needs, and the relationship between childcare workers

——Based on the interview survey at a new nursery school——

Mami SHIRATORI¹⁾ • Michio KOJIMA²⁾

1) Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

2) University of Tsukuba

【abstract】

【Purpose】 Since the restriction on the establishment of nursery schools was abolished in 2000, many new nursery schools have been established. There has been very little research on newly established nursery schools, and more and more nursery schools are being built in urban areas, such as those that do not have a yard and those that are in apartments. According to the National Council for Childcare (2016), in addition to children with disabilities, as many as 80% of all childcare centers have children who have not been diagnosed with disabilities but require special support. With this background, we decided to clarify the changes of children in the class including children with special needs in a newly established nursery school through an interview survey with childcare workers.

【Methods】 In a newly established nursery school, six childcare workers who were involved with the two- and three-year-old classes where children with special needs were enrolled were targeted. A total of five surveys were conducted over a period of about one and a half years, and the changes in the two- and three-year-old classes were clarified through interviews with the childcare workers. The content of the interviews included the state of the class, including the relationship between the children and their growth, what difficulties the childcare workers were facing and how they were solving them, and what they were paying attention to in their childcare.

【Results】 As a result of the M-GTA analysis, 4 core categories, 9 categories, and 26 concepts were generated. As for the changes in the children in these classes, it became clear that the children changed from a period of exploring each other to a form of acknowledging each other.

【Discussion/Conclusion】 The childcare workers were experiencing difficulties, but were still trying to find specific childcare methods through trial and error. While giving individual attention to children with special needs, it was suggested that getting through the events and not overworking the children were effective in changing the children in the class. In addition, one of the factors related to the difficulties felt by the childcare workers, the concept of not being able to provide the childcare they want, is an issue common to newly established nursery schools that are in the process of examining their childcare methods, including the composition of the environment.

【Key words】 Children with special needs, newly established daycare centers, changes in children in the classroom, inclusive education